

一般的信頼を基盤とした英語 Willingness to Communicate モデルの検討

○伊藤健彦¹・上市秀雄²

(¹法政大学・²筑波大学)

キーワード：一般的信頼, Willingness to Communicate, 国際的志向性

The Model of Willingness to Communicate in English Based on General Trust

Takehiko ITO¹ and Hideo UEICHI²

(¹Hosei University, ²University of Tsukuba)

Key Words: General Trust, Willingness to Communicate, International Posture

目 的

本研究は、日本人を対象として、一般的信頼を基盤とした英語 Willingness to Communicate (以下 WTC) の心理的要因モデルを検討した。WTC はある特定の状況で第二言語を用いて自発的にコミュニケーションをしようとする意思 (八島, 2008) を指し、第二言語コミュニケーションの自信などの認知・感情要因の影響を中心に数多くの研究が行われてきた。最近では、そもそもコミュニケーションの相手がどのような人間かを判断するという、コミュニケーションの文脈において基盤となる要因の視点が WTC 研究に欠けていることから、一般的に他者をどの程度信頼するか個々人の認知傾向である一般的信頼 (山岸, 1998) が WTC に与える影響の研究が行われている (Ito, 2022)。しかしこうした研究では WTC に影響を与える心理的要因を網羅的に扱っておらず、一般的信頼の観点から見た心理プロセスが不明瞭であった。そこで本研究では日本人を対象として、英語 WTC に関わる認知・感情の影響を包括的に扱い、一般的信頼を基盤とした英語 Willingness to Communicate モデルを検討した。

方 法

参加者 2023年2月1日～3日に調査会社マクロミルによるオンライン調査を行った。対象は日本全国に住む20代から60代で各年代100名(男性50名女性50名)合計500名の日本人であった。年齢の平均は44.63 (SD = 14.03) 歳であった。

調査項目 英語 WTC74項目 ($\alpha = .96$; 伊藤, 未発表), 一般的信頼6項目 ($\alpha = .91$; 山岸, 1998), 英語不安3項目 ($\alpha = .73$; MacIntyre & Charos, 1996), 英語学習動機3項目 ($\alpha = .94$; Yashima, 2002), 国際的志向性22項目 ($\alpha = .90$; Yashima, 2002), 英語コミュニケーションの自信74項目 ($\alpha = .95$; 伊藤, 未発表), ビッグファイブ性格特性2項目ずつ(外向性 ($r = .38^{**}$), 協調性 ($r = .16^{**}$), 勤勉性 ($r = .27^{**}$), 神経症傾向(逆転, $r = .34^{**}$), 開放性 ($r = .25^{**}$); Oshio et al., 2012), 普段英語話者と接する機会・過去に英語話者と接した経験 (Ito, 2022)。いずれも5件法であった。

結 果

近接因を統制した回帰分析 英語 WTC の近接因である英語不安, 英語学習動機, 国際的志向性, 英語コミュニケーションを統制した回帰分析の結果, 一般的信頼の効果は見られなかった ($\beta = .01, n.s.$)。一方で国際的志向性は WTC に正の影響を与えており ($\beta = .15, p < .01$), 英語コミュニケーションも WTC に正の影響を与えていることが分かった ($\beta = .81, p < .01$)。

性格・環境を統制した回帰分析 ビッグファイブ性格特性や普段英語話者と接する機会・過去に英語話者と接した経験を統制した回帰分析の結果, 一般的信頼は WTC に正の影響を与えていた ($\beta = .08, p < .05$; Table 1)。

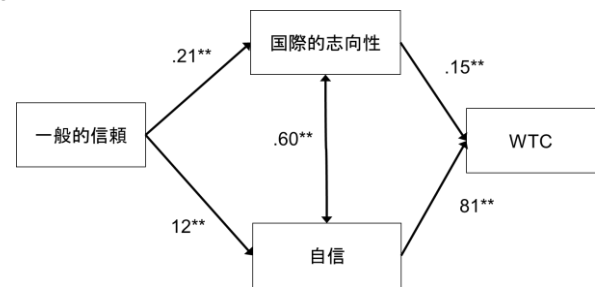
Table 1 性格・環境を統制した一般的信頼の WTC への効果

	β
一般的信頼	.08 *
外向性	.05
協調性	-.01
勤勉性	.00
神経症傾向	.04
開放性	.07 +
性別	-.01
年齢	-.02
普段英語話者と接する機会	.25 **
過去に英語話者と接した経験	.42 **
R^2	.45 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

回帰分析の結果から、一般的信頼は国際的志向性と英語コミュニケーションの自信を媒介して英語 WTC に影響を与えることが考えられた。そこでこのモデルを検証するため、構造方程式モデリングを行った結果、モデル内の各パスは有意であり、モデルの適合度は高い値を示した ($\chi^2(1) = .36, p = .55, GFI = 1.00, AGFI = .99, CFI = 1.00, RMSEA = .00$; Figure 1)。

Figure 1 一般的信頼を基盤とした WTC モデル



考 察

本研究の結果から、一般的信頼は国際的志向性や英語コミュニケーションの自信を媒介して英語 WTC に正の影響を与えることが分かった。Ito (2022) では一般的信頼が英語コミュニケーションの自信を媒介して WTC に影響を与えることが示されていたが、本研究は心理的要因を網羅的に扱うことによって、心理プロセスには国際的な物事への興味や行動傾向を表す国際的志向性が必要であることが明らかとなった。本研究によって、コミュニケーションの相手が信頼できるかどうかの判断が、志向性や自信を生み、第二言語でのコミュニケーションの積極性を促進させることが示唆された。

引用文献

Ito, T. (2022). Effects of general trust as a personality trait on willingness to communicate in a second language. *Personality and Individual Differences, 185*. <https://doi.org/10.1016/j.paid.2021.111286>.